

# お寺の社会性

## 式

### — 生臭坊生のつばやき —

#### 竹中尚文

##### はじめに

年が明けて、1月15日に藤原さんが亡くなった。第二回用に別の原稿を書いていたのだけれど、今回は藤原さんとの話を書きたいと思ったので差し替えることにした。

##### 1. 藤原敏弘さん

藤原敏弘さんは満53歳であった。肺癌だった。職業は葬祭業だった。数年前に私の父親の葬儀を藤原さんにお願ひした。30数年前に亡くなった祖母の葬儀を引き受けてくれたのは藤原敏弘さんのお母さんだった。藤原さんはお母さんから葬儀屋さんを引き継いだのだった。

もう14年も前だろうか、藤原さんは家族経営の葬儀屋さんを元に同業者と共に会社としての葬儀会館を興した。それまでは、一般の葬儀が自宅からセレモニーホールへ移り変わる頃であった。この変化は葬儀の場所が変わったということだけでなく、葬儀の社会的変化の時代でもあった。自宅でする葬儀は近隣の人たちの協

力が不可欠であった。そこでは葬儀屋さんが必要なところだけプロの技で手を貸してくれるのであった。

この時代の変化の中、あちこちで家族経営の葬儀屋さんが消えて、会社経営の葬祭業者が登場してきた。この中で、藤原さんの仕事は生き残った。そこには、藤原さんのお母さんが「お金がない」と言った人にも、「まかしとき！ちゃんとしてあげるで！」という葬儀屋スタイルも生き残った。

藤原敏弘さんのお母さんは肝っ玉かあさん的な葬儀屋さんであった。一方、敏弘さんは研究熱心で、葬儀での所作の意味をよく知っていた。その上で、依頼者の希望を具現化することに工夫する人であった。それは、多くの葬儀会社がどうすれば依頼者が少しでも多く支払ってくれるかを目的として「葬儀を作り出す」とは一線を画すものであった。根拠もなく、遺族感情におもねるような儀式を作り出すのは、一時的な儀式である。それは遺族が葬儀会社に

支払いの機会を増やすことを意味する。

藤原さんはよく「葬儀屋は人ですよ」と言った。よく、どこの葬儀社がいいとかと耳にするが、そんなものでもないとも思う。葬儀はサービス業である。葬儀社で提供される物品にそれほど大差はない。お棺や生花や霊柩車などに違いを見いだす人がいるが、わずかな違いである。それより、どんな人が担当してくれるかである。同じ葬儀社でも、同じ料金でもどのような担当者がやって来るか解らない。私が傍目から見ていても、この人に担当してもらいたくないとか、この人に担当してもらいたいとかはある。担当者名を前面に出さない葬儀社もあるが、それはハンバーガーショップの店員さんがいつも名乗るわけではないのと近い理由があるのかもしれない。

藤原さんが「葬儀屋は人ですよ」と言うのは、「坊主も人ですよ」に通ずる。

## 2. Gさんのお葬式

12月、藤原さんを病院に訪ねた。冬の夕暮れは太陽に力がない。二人で話し込むのに人の少ない場所を探した。私たちが話し始めると、いつしかお葬式の話になる。それも熱を帯びて話し込むようになる。病院でお葬式の話は他の患者に遠慮である。

冬の弱い日差しが消えていく中で、

私たちの話はやはりお葬式だった。

「Gさんのお葬式の時はどうしようかと思った」と藤原さんが言った。

数年前のある日、お昼前にGさんがお寺を訪ねてきた。その朝、お父さんが亡くなったと言う。お父さんは、日頃から「ウチにはお金もないのだから、自分が死んだら火葬場まで運んで焼いてくれ」と言っていたそうだ。けれども、お父さんの顔を見ていたら、そんなことは出来ないと思った。今の自分がいるのはお父さんのおかげだと思うので、ただ焼いてしまうなんてしたくないと言う。一方、両親にお金もないし、自分はシングルマザーでようやく一人息子が高校を卒業したところで、貯金もないけれどお葬式は出来るかという相談に来た。

お金はないけれど送る気持ちがあるお葬式、お金はあるが送る気持ちのないお葬式、お葬式は前者である。

まず、お葬式は場所と時間を決めるところから始まる。場所については、Gさんの自宅にそのスペースはない。お棺を置くと他に一人も入れない。また、Gさんの玄関は生きている人間は出入り出来るが、お棺の出入りはできない。今の日本の家屋でお棺の出入り以前に、ストレッチャーの出入りも出来ない住居がかなりある。

次にウチの寺の本堂を式場として使うことを提案した。自宅から遠すぎるということで、Gさんは乗り気

ではない。近所の人達にも来てもらいたいのだろう。私たちが住んでいる市には、市立の火葬場の建物の中に、小さな式場が一つある。火葬場に電話で問い合わせた。2日先なら空いているということなので、直ぐに予約をするのでと言って電話を切った。この式場は使用料3万円である。市に登録をしている葬儀業者を通じて予約をすることになっているので、藤原さんに電話をして予約を入れてもらった。葬儀も併せて頼んだ。

この式場は市立なので安価である。安価であるが、私はあまりこのことを言わない。私たちが住んでいる市では、公立の葬儀の式場は一カ所である。比較的経済的ゆとりのない人にこの場所をとっておきたいので、言わないのである。

葬儀の場所と時間は決まった。後は詳細を決めるのである。Gさんと一緒に藤原さんの葬儀会社に行った。藤原さんは、お棺とドライアイスだけは必要であると言った。葬儀場までの寝台車も必要であるはずだが、藤原さんは言わない。きっと自分の会社の車を自分で運転してくれるつもりだろう。でも、翌日に葬儀会社の寝台車が空いている保証はないが、予約をしてキープすると料金がかかってしまうので、言わないのだろう。他と重なって困ったら、手はある。プロはいろんな手を知っている。藤原さんはプロである。

葬儀の概要は決まったが、現実にはまだ何も手が着いていない。夕方に、藤原さんとGさん宅で会うことになった。藤原さんはGさんに、帰り道にホームセンターで安い浴衣を購入するように言った。会社の白の帷子(かたびら)を準備するよりずっと安価なのだろう。

日の暮れに、Gさんのお宅に行った。人手が少しでも必要だろうから家内も一緒に行った。藤原さんは先に到着していて、熱っぽい顔だった。風邪をひいているのにこの時に気がついた。二階建ての市営団地で、一棟に一、二戸しか住んでいない。他は空室である。市は取り壊すつもりだろうか、新たな入居者も入れていないようだし、十分な管理修繕ができていたとは言い難い。その二階の部屋でGさんのお父さんは首を吊った。朝に検視があつて、そのままだった。私は藤原さんに手伝ってもらって、その部屋で湯灌をするつもりだった。藤原さんは会社からドライアイスが届けるだけの仕事で、湯灌は料金に入っていない。

余談になるが江戸時代、湯灌は坊さんの仕事であつたようだ。湯灌については研究も少なく、私の見解で述べる。亡くなると「おかみ剃り」あるいは「おこ剃り」と言って、仏門に入ると言う意味で剃髪式をするのである。現代はカミソリを額にそっと触れるだけの剃髪のまねごとをする。私の使っているカミソリには

刃がない。江戸時代は実際に剃髪をすることもあったかもしれない。頭髪を幾分かでも剃ると、頭を洗ったりぬぐったりしたのだらう。それが、湯灌に発展したのではないかと思われる。また、江戸時代には僧侶が湯灌に立ち会わねばならなかった。それは死亡を確認して宗門人別改帖に記載しなければならないからである。宗門人別改帖は現在の戸籍である。だから、戸籍制度というのは世界共通の制度ではなく、日本の制度なのである。

話を戻そう。藤原さんがGさん宅から出てきて、「無理、無理」と言った。Gさんのお父さんの部屋は一人が横になるスペースしかない。この部屋では湯灌どころか何もできない。とにかくお父さんの遺体をどこかに移さないと何もできない。Gさん宅にはそのスペースはない。団地の隅に集会場のような部屋があったように思ったので、Gさんにこの団地の地区長さんにこの集会室の使用を頼みに行ってくれように頼んだ。地区長さんはGさんのお父さんだった。Gさんは直ぐに集会室の鍵を持ってきてくれた。

お父さんの遺体を毛布でくるめて、二階の窓から運び出すことにした。二階の部屋には一人分のスペースしかないので、藤原さんが入ると言った。私と家内が窓の外で受け取ることにしたが、誰が見ても私たち二人では力不足である。いつの間にか、

近所の人たちが集まっていた。30代の男性が外から二階の窓によじ登って、半身を部屋に入れるようにした。ちょうど窓の下辺部に馬乗りになるようになった。2、3人の二十歳まへの男性が塀の上に立ったり木に登ったりして窓の外の手伝いの位置についた。

毛布に包まれたお父さんの遺体は、藤原さんに抱きかかえられてゆっくりと窓から出てきた。かなり死後硬直がでていようでもまっすぐで、しなることがない。30代の男性の手助けもあって、お父さんの遺体は水平に窓から出て、少しずつ下向きに角度を変えた。誰かが「あかん！」と声をあげた。お父さんの遺体が毛布から滑り落ちそうになった。30代の男性がロープを持ってきて、毛布の端を縛った。ちょうど飴玉の包装のように端を絞って、中央部を緩く締めた。そうすることで、周りの人たちが手で握り易くなった。そうして、お父さんの遺体は下にいる私たちの所についた。毛布にくるんだまま、集会室までお父さんを運んだ。

集会室でお父さんを包んでいた毛布をといて、そこに先に敷かれてあった布団に遺体を移した。いつの間にか、手伝ってくれた人たちはいなくなった。藤原さんと私だけになった。私はGさんのお父さんの額に剃刀をあてて「おかみそり」の儀式をした。二人で湯灌をして、浴衣に着替えさせようとした。お父さんの身

体は死後硬直のために動かない。い  
つもなら、藤原さんはいとも簡単に  
関節を動かして思いの姿勢を作って  
しまう。死後硬直が弛む時があるら  
しい。このときは、その弛む時を待  
ってられない。藤原さんは風邪で  
熱っぽい身体で、額に汗をながらし  
ながら、関節を動かそうとしていた。

藤原さんが「よく昔、骨をボキボ  
キ折って納棺をしたという話を聞き  
ますが、あれは嘘だと思いますよ」  
と言っていたことがある。人間の力  
で、人の骨をボキボキ折るなんて、  
かなり難しい作業になる。

このときは藤原さんと私の二人で、  
渾身の力でもってお父さんが胸で手  
を組んで、静かに横たわっている姿  
を作った。やはり骨は折れなかった。  
お父さんは布団の中で横たわってい  
た。枕元に、坊守（住職の妻のこと）  
がろうそくを灯して香を焚いた。そ  
うしてGさんたちを集会室に招き入  
れた。いわゆる枕経、『仏説阿弥陀経』  
の読経がようやく始まった。結局、  
ドライアイスを届けに来た藤原さん  
は料金に入っていない仕事を汗だく  
になってやり終えた。

翌日、市営の式場に遺体を運んで  
通夜をして、葬儀に事が運んだ。

### 3. あとがき

話は、再び12月の病院での藤原さ  
んに戻る。藤原さんは「あの時は、  
やっぱり近所の人たちやGさんの息  
子の友達が助けてくれたからできた

お葬式だ」と言った。人のつながり  
によってお葬式をしてきた人の言葉  
である。お葬式は人のつながりによ  
って成り立っていた。仏教的には、  
死を超越したつながりがそこにある。

この文章を書いている数日前のこ  
とである。ある人が亡くなった。遺  
族はお金がないと言うので、市役所  
に相談に行った。役所は15万円です  
てくれる葬儀社を紹介するという返  
事だった。結局、藤原さんの興した  
会社をお願いして78,000円程を分  
割払いでしてくれることになった。  
藤原さんの仕事はこの会社で受け継  
がれている。

アメリカの番組で訃報を伝えると  
きに、「stay with us」と言うことが  
多い。これを「ご冥福をお祈りしま  
す」と訳されることも多い。「冥福を  
祈る」という言葉に無責任さを感じ  
る。それは、自分は冥土に往く気も  
ないのに他人は冥土に往くのか、と  
思ってしまう。

藤原さんの葬儀に駆けつけた沢山  
の人が「お世話になりました。あり  
がとう」という気持ちであったら  
う。その中にはGさんもいた。感謝  
の気持ちに「藤原さん、また会いま  
しょう。それまでは頑張るからね」  
という言葉添えたい。

最後に、藤原さんがよく言ってい  
た言葉を記しておく。「ぼくらは、人  
のお世話をさせてもらってるんや」